

教育と史跡：仙台城二の丸から

阿子島 香

[読む館長講座④]

東北歴史博物館館長講座概要

2023年7月22日

「東北グローバル考古学 part3—いにしえから、今を考える—」④

はじめに

今年度の館長講座は、宮城県・東北地方と世界の遺跡を比較文化的に捉えて、「温故知新」すなわち現代への意義を探ります。全8回は、次のような内容で進めていきます。「石器時代の経済学」「太古のアート：具象と抽象との間」「日本人・日本文化はどこから来たか」「教育と史跡：仙台城二の丸から」「隣の国と考古学1：サハリン」「隣の国と考古学2：韓国」「北米先住民と開拓者の文化財保護」「縄文の思考・弥生の思考と現代」の順でお話しします。昨年度・一昨年度の講座に引き続いて、「人間とは何か」を大きなテーマに考えていきます。また、令和3年度、令和4年度とも、各回の講座のあとに、改めて補足加筆を行ないまして、エッセイの形「読む館長講座」に再構成しました。そして、両年度分ともに、当博物館のHP上に、PDFファイルの形で公開しております。どなたでも、自由に無料ダウンロードできますので、どうぞご利用ください。

時代を超えて考える

令和3年度は、人類の誕生から、日本列島へのホモ・サピエンスの渡来、そして縄文時代に至る道まで、「時代を追って」考えてみました。令和4年度は、毎回テーマを変えて、人類史の歩みから「時代を通して」考えてみました。今年度は、歴史から現在にむかって「時代を超えて」考えてみます。私たちの郷土みやぎの先史時代、古代の文化遺産の内容は、世界各地の同時代、あるいは同様な文化段階や生活様式の文化遺産と比較した場合に、どのような特徴があり、どのような類似や相異が認められるのでしょうか、またそれはどのように理解していけるのでしょうか、当館長の独自の視点を含めて、探っていく予定です。どうぞよろしく、お付き合いください。（初めてのお客さまに、ここまでは①回からの再掲です。また東北歴史博物館講堂にて、お待ちしております。）

大学構内の文化財問題

今回の講座は、「教育と史跡：仙台城二の丸から」という題目ですが、副題は（大学構内

の埋蔵文化財) としました。文化財保護をめぐっては、「文化財は大切に、歴史を知ること
は、将来への指針になります」という趣旨には、賛同される方が多いでしょう。しかし、総
論を離れて各論になりますと、この場所は現代の生活に不可欠です、ということも頻繁に
聞かれる言葉です。まさに、簡単に答えることができない「難問」で、古くて新しい問題と
いえるでしょう。

館長は、東北歴史博物館に来る前は、川内キャンパスでの勤務が長かったこともあります
ので、参考の事例としまして、東北大学の構内に存在する埋蔵文化財と、教育とのかかわり
に関して、少し考えてみたいと思います。

東北大学埋蔵文化財調査室

今回の資料は、東北大学埋蔵文化財調査室(以下、「埋文調査室」)の、歴代の担当者の調
査により解明されてきた内容のご紹介が中心になります。東北大学のキャンパスには、多く
の遺跡が存在します。青葉山地区、その他の地区にも遺跡がありますが、今回は川内地区を
中心に考えてみます。埋文調査室は、すべてのキャンパス地区での構内遺跡の調査、研究、
活用に従事する「大学特定事業組織」です。各学部、各研究科からは独立しています。室長
は併任の教授で、調査室には現在、特任准教授1名、調査員2名が専任で業務に従事してい
ます。所属・事務取扱は大学本部施設部になります。開発行為を行なう部署に調査室がある
ということですが、教育研究のための施設整備に必要な、現実的な対応と考えてきました。

調査室の変遷と雑感

1983年に組織ができてから、ずっと施設部と協力しつつ、文化財保護に努めてきました。
簡単に歴史を見てみますと、83年に実務にあたる助手2名で調査室が発足し、各キャン
パス地区や専門分野の、全学から委員が出て埋蔵文化財調査委員会が組織されました。1994
年に「埋蔵文化財調査研究センター」に改組されました。そして、2004年には、国立大学
が法人化されました。2006年に全学の特定事業組織となり、現在の埋文調査室に至ってい
ます。

私自身は、埋文調査室運営委員を1991年から2019年度までずっと務め、2003年からは
埋文調査研究センター長、2006年からは埋文調査室長を2015年度まで拝命しました。大
学なのだから文化財調査には常に十分な理解があるだろうと思われがちですが、必ずしも
そうでもありませんでした。お話(会場での)の中で少し触れたいと思います。この間、専
任調査員3名の、まさに献身的な努力と、大学内の理解ある教員や事務方のおかげで、何と
か継続してきたという実感です。法令等に保護されているということの重みをも、実感して
きた年月でした。

遺跡と川内キャンパス

仙台城との関係では、川内南キャンパスが、おおむね仙台城二の丸地区にあたります。川

内北キャンパスは、おおむね**二の丸北方武家屋敷地区**にあたります。二の丸地区の変遷に対応して、武家屋敷地区の土地利用や遺構も連動して変化しました。川内南地区には、伊達政宗が仙台城を築城してから、政宗の四男である伊達宗泰の屋敷があったと伝承されていましたが、絵図などの資料はありませんでした。埋文調査によって、宗泰屋敷が実在したことが判明しました。また二の丸造営以前に、政宗の長女である五郎八姫（いろはひめ）が仙台に戻ってから宗泰屋敷の北側に、五郎八姫の「西屋敷」が存在したことも分かりました。現在の附属図書館2号館の付近です。（参考：東北大学埋蔵文化財調査室だより vol.1-8）。

二の丸の造営と改修

寛永15年（1638）に、二代藩主の**伊達忠宗**によって、**二の丸が造営**されました。中奥もありました。正保2・3年（1645・46）の「奥州仙台城絵図」により、二の丸北側に西屋敷が存続したことがわかります。寛文元年（1661）以降、五郎八姫の死去により「天麟院様元御屋敷」と呼ばれ、蔵などがありました。元禄年間（17世紀末～18世紀初頭）を中心に、四代藩主**伊達綱村**により、**二の丸は大規模な改修**がなされました。西屋敷があった区域を取り込んで、中奥が拡張されました。文化元年（1804）には、落雷による火災のため、二の丸は焼失します。火災後には、復興のための大規模な土木工事がなされ、遺構・遺物比定の基準になっています。暫定的な建物跡も発掘されています。

川内北キャンパスの武家屋敷地区

このように、約350年に及ぶ歴史が、重層して川内地区の地下に埋もれています。川内北キャンパスの武家屋敷地区においても、多くの歴史遺産が発掘されています。**武家屋敷**の遺構、池や井戸やゴミ穴、陶磁器をはじめとする出土品の数々、江戸時代を通じての土地利用の変遷、道路の位置の確定、二の丸からの廃棄物の集積場所などがあります。

主が判明した武家屋敷遺構もあります。扇坂のバス停から少し東側に、課外活動施設があります。1995年に学生諸君の長年の希望だった「恒久サークル部室棟」が建設されることになり、事前調査で武家屋敷の遺構が発掘されました。絵図と照らし合わせて、幕末期の「大松沢越中」の屋敷跡だったことが判明しました。江戸時代各期にわたる柱穴が、1036本も検出されました。

第二師団期と米軍基地期

明治維新を迎えて仙台城は廃城となりました。明治15年（1882）に火災があり、二の丸だった建物は焼失しました。その後、**陸軍の第二師団司令部**が置かれた場所となり、師団期の多くの施設の遺構が確認されています。大量の遺物が出土した調査区もあります。終戦後には、アメリカ軍の基地となりました。駐留第9軍の司令部が置けられました。**Camp Sendai**という基地名で、将校宿舎、映画館、チャペルなどもありました。米軍期の遺構も多く検出されています。

仙台城跡は、2003年8月27日付けで、**国指定史跡**となりました（部分指定）。仙台市は、「史跡仙台城跡整備基本計画」をまとめ、令和3年3月刊行で公開されています。その中で、川内キャンパス南部は、「史跡指定を目指す範囲」に地区区分されています。教育と史跡との関係は、なお将来に残された課題となっています。

情報の公開

以上、当日の配布資料により全体の要旨をまとめました。講演では75枚のスライドを使用して、川内キャンパス地下にあった実際の状況をご理解いただけるように、多岐にわたる内容でお話しました。画像を含まない「読む館長講座」で尽くせない部分が多いですが、次に、いくつかのトピックを選んで補足したいと思います。どうぞ気軽にお読みください。

大学構内の具体的な発掘調査地点、その成果については、ここで要約するには余りにも膨大です。また私がダイジェスト的にご紹介をする立場でもありません。講演では、埋文調査室が公表している既刊の調査報告書、また広報資料の写真や図を活用して、お話をしました。それらについては、ほぼすべてが公開されています。

東北大学のHPから埋文調査室に入ってもよいですが、近年埋文調査室は情報公開に積極的に努めています。**東北大学埋蔵文化財調査室** で、**検索**、項目、資料リストや解説ができます。特にイチ押しは、『東北大学埋蔵文化財調査室だより』で、たいへんに分かりやすいです。現在のキャンパス地図に、これまでの発掘調査の成果からピックアップして紹介しています。また実際の仕事での調査、整理、保存、分析など、幅広く解説しています。詳細な調査報告のシリーズは、文末の**参考文献2** にあげておきました。これらはオープンアクセスで利用できます。

新入生のために

東北大学に入学された学生諸君に、**キャンパスが歴史的にどのような場所**であるのか、知っていただくことが重要です。毎日、学んでいる大学の地下に、何があったのか、また今も埋もれているのか、なかなか実感が湧かないのが現実です。毎年約2500人の新入生を迎えて、初めの2年間ほどを過ごすことになる川内キャンパスについて、広報に力を入れてきました。スライドは、多くの時間を過ごす附属図書館の本館ロビーと、通学に利用者が多い地下鉄東西線、川内駅の駅前広場です。当たり前の大学キャンパス風景ですが、構内は昔に比べて随分、綺麗になってきました。駅前広場には時計台もできました。このようなキャンパスに、実は地下には多くの埋蔵文化財が眠っていて、施設整備のために発掘調査が実施されてきたことは、それほど知られていないようです。先述のように附属図書館の西側2号館の場所には、伊達政宗の長女であった五郎八姫の西屋敷の一部と推定される遺構が見つかり、川内駅前広場では、武家屋敷の遺構が大量の出土品とともに発見されました。川内北キャンパス、南キャンパス、至る所に遺跡が眠っていると言っても過言ではありません。

私は教員を定年退職すなわち「卒業」しましたが、あまりにも長年、ここで暮らしていた

ので、文章が第一人称に近くなる部分があればご海容ください。教養部に入学してから定年退職まで、留学時代を除いて40数年間、川内キャンパスで暮らしてきましたので、埋もれた歴史遺産の地上にることがごく当たり前感じられます。

今日のテーマ「教育と史跡」ですが、若者たちには、生活において「歴史との共生」をアピールしたいところです。「経済か歴史か」あるいは「保護か開発か」といった択一的な発想ではなくて、歴史を遺産として考え、感じる生活を始めて欲しいと思います。地球環境の保全や、価値の多様性が喫緊の課題である現在にあって、過去に学ぶことは多いはずですが、やや一線的な経済成長を目指す時代は、すでに過去の歴史になりました。

開発と文化財保護

昭和時代後期の高度経済成長期にもはやされたような「モーレツ社員」的発想は、もはや多数が支持する生活哲学ではなくなりました。「成長の限界」が言われてから、すでに50年くらいになっています。「地球環境に優しく」という哲学は、遺跡や歴史的文化遺産を貴重と考えることにも相通じていると思います。

一般に、「文化財保護」は、「保存と活用」の両者から構成されます。高度経済成長期には、開発による破壊からどのように文化財を守っていくかという大きな課題が目前にあり、保存に重点が置かれてきました。日本では行政的に、世界的にも類のない事前の発掘調査の仕組みが高水準で整備されました。行政の用語としては、「記録保存」ということになりませんが、遺跡は消滅してしまいました。発掘調査報告書の水準は、世界でもトップクラスの日本考古学の現在に至ったわけです。現在も毎年、およそ8000件もの発掘調査が実施されているという統計があります。

重要な価値が認められる遺跡は保存されて、史跡に指定されてきました。次第にその後、出土品を含めて、市民生活に活用していく方向が重視されるようになってきました。2017年に「文化芸術基本法」が施行され、2018年には、「文化財保護法」に大きな改正が行われました。また「文化観光推進法」も2020年に公布されました。さらに、「改正博物館法」が2023年に施行されました。これらは相互に関連があり、また国や地方自治体の施策に大きな変化が現れ始めています。ざっくりと見て、地域の活性化・地域経済振興に向けて、文化財を日常生活や旅行などにも、大きく活用していこうという方向になっています。文化財は、また「文化資源」としても位置づけられるようになります。

「川内歴史さんぽ」と萩ホール展示

新年度に、埋文調査室、附属図書館、史料館の三者が共同で、桜の季節にガイダンス的な展示が続けられています。題して「川内歴史さんぽ」です。附属図書館のエントランスロビーで、企画展示があります。学生証ゲートの手前にありますので、みなさんも春にはご覧になれます（無料）。桜の季節、中善並木の通りを南北に歩いて花見がてら、いかがでしょうか。この通りは隠れたる花の名所との声もあります。なお、「中善並木」は、法学部の中川

善之助名誉教授が苗木植樹に縁があったことから、こう名付けられました。中善並木から東には、「三太郎の小径（こみち）」が分かります。散歩道に良いです。仙台市博物館の方まで続きます。歩けば、美を愛でて哲学したくなるのではないのでしょうか。近代日本の代表的哲学者、法文学部の**阿部次郎**（1883－1959）の生誕百年を記念した散歩道です。かつて大正・昭和戦前期に、永遠の青春の書、学生の必読書として一世を風靡した随筆評論集『**三太郎の日記**』（合本）ではなくて、別の主題を思い浮かべる学生さんも多いらしく、少々寂しいです（マンガや飲食店ほか）。

今年の例では、学生運動のアジビラ（1968年頃）、鬼仏教官表（新入生の時に買って科目履修の参考に！ 学生サークルが作成。今は昔の感があります）、アインシュタインの書簡（1922年、土井晩翠あて）、帝国陸軍の物品（薬瓶ほか）などから、二の丸地区第9地点出土の「南蛮人人形」（志野織部）、武家屋敷出土の玩具、陶磁器、古く縄文土器、磨製石斧まで、少しずつですが、この地の「歴史の重なり」を感じることができるでしょう。

「三太郎の小径」は、川内萩ホールの敷地を通ります。萩ホールは、元川内記念講堂で、1957年の大学創立50周年を記念して計画されました。現在の萩ホールは、創立百周年（2007年）記念事業でリニューアルされたものです。コンサートに特化した設計で、音響には定評があります。コンサートホールと国際会議場を両立させた設計と評価されています。

萩ホール内の入り口には、川内キャンパスエリアの歴史を実物と共に解説するコーナーが設けられています。「川内今昔ものがたり」展示です。史料館、埋文調査室、植物園による共同展示です。ホールの事務室で申し出れば、見学できるということです（無料）。（イベントや都合による不可の日時もあります）。

「東北大学歴史遺産マップ」

またネット上にて、「東北大学歴史遺産マップ」として、片平、川内、青葉山の各キャンパスにある歴史的なモノ（記念碑や、建物、発掘地点ほか）を、どこに何があるか画面上で、クリックすると詳細が出てくるような工夫がされています。埋文調査室 HP から入ります。

一般に、遺跡は埋め戻されるか、消滅してしまう（発掘調査による「記録保存」が行われると、開発工事になって遺跡はなくなる順序）ことが多く、場所を歩いただけでは、なかなか往時を偲ぶことは難しい面があります。気づかずにいるのが普通です。このような遺産マップを活用して、意識的に過去を訪ねることも、有意義だと思います。

これはキャンパス内に限られないことです。旅行や出張で、いずこに行っても、その土地の歴史を気にするようになれば、あなたも「歴史ファン」で、次々と「**土地に刻まれた歴史**」の中に我々は生きてると実感できるでしょう。ややマニアックかもしれませんが、私たちの認識が、過去・現在・未来に連続していくことになるでしょう。学生の皆さんには、その第一歩を、毎日学ぶキャンパスで経験してほしいのです。実際の土地で実感することは、書物や画面上で知識として接するよりも、ずっと深い経験になると思います。

歴史遺産に触れることは、過去の時代の生活を、現在から追体験することに通じます。そ

して、実際の歴史資料は、バーチャルな経験からは得られない共感をもたらしてくれるでしょう。実物が持つ迫力は、過去への想像をかきたてて、いわば時間を超えた認識へと導くと 생각합니다。すなわち**過去、現在、未来を通じた世界**に生きていくことになるでしょう。

歴史ファンというと、何かシニア世代のようなイメージがありますが、むしろ今後人生を切り拓いていく若い世代にこそ、過去に遡る経験を重ねて欲しいと考えています。私は文学部の史学科で教育活動に従事してきたものですが、文学・教育・法学、経済などの分野は関係なく、理工系や医薬系でも、それぞれの分野での過去の歩みを、自らのものとする大切さを強調したいと思います。それぞれの考えの幅が大きく広がるでしょう。時間を超える広い思考は、読書の経験が広げてくれる自己の拡張と、ある意味、少し似ているように思われます。

「ギャラリーひすとリア」と登録有形文化財

片平キャンパスの北西端に近く、放送大学宮城学習センターがあります。片平丁小学校の隣りになります。この建物は、旧東北帝国大学理学部生物学教室で、歴史的価値を有する建造物として国の登録有形文化財になっています。建物の1階に、大学の歴史を展示する「ギャラリーひすとリア」が2022年に整備されました。埋文調査室も展示に参加しています。現在のところ、火曜日と木曜日の12時～16時に一般公開されています。無料です。（詳細はご確認ください）。

片平キャンパスには、国の登録有形文化財になっている建造物が13件あります。2017年に5棟、2021年に8建造物が登録されました。東北大学史料館の建物、大学本部棟、金属材料研究所本多記念館、「魯迅の階段教室」、文化財収蔵庫（旧第二高等学校書庫）、東北大学正門、などがあります。資料を片手に外観を探訪するのも、一興かと思えます。建築学的にも、近代建築史のいくつかを訪ねる機会にもなるでしょう。一か所にまとまって歴史的建造物が残されているのは、貴重に思われます。

アメリカ軍の足跡など

近い過去では、川内キャンパスが米軍キャンプだった頃の足跡が残っています。地下にも多く埋まっています。戦後、川内地区には、アメリカ第9軍司令部が置かれて、Camp Sendaiと呼ばれていたのは先に説明しました。スライドは、Camp Sendaiを西側から見た俯瞰写真です（仙台市戦災復興記念館所蔵）。米軍基地は、1957（昭和32）年まで存在し、日本人は普通には入れない場所でした。各種部隊の兵舎、将校クラブ、映画館（Kawauchi Theater）、売店（PX、ピーエックス といって、ちょっとしたスーパーとのこと）、などが立ち並んでいました。アメリカ軍基地は、世界のどこでも本国と同じ生活を送れるようにという考え方がありました。将校家族宿舎は、平屋建て、明るい色調で、芝生があり、アメリカ車が駐車していました。これら宿舎跡地は、私が大学入学の頃まで、一部が残っていて、大学施設に使用されていました。

ここに、1960年代から、順次、東北大学の新施設が建設されました。片平や三神峯からのキャンパス移転に際しては、埋蔵文化財の発掘調査は行われませんでした。1960年代の状況では、まだ**近世の遺跡**については、**埋蔵文化財**の保護政策の対象になっていない部分が多くありました。けれども、1960年代の建築工法では、必要な最小限の部分の掘削して、そこに基礎を打って建物を作るという方法が通常だったようです。細かい図面は大学にもほとんど残されていません。発掘調査してみると、現在の大学建物の基礎の間に、かなり保存がよい過去の遺跡遺構が残存している場所が多くあります。

近年の大学施設整備のための事前発掘調査によって、多くの米軍施設の遺構が検出されています。多くはコンクリートを大量に使用し、恒久的に作られていました。集中暖房の施設は、共同溝として存在し、発掘調査でも行き当たります。

米軍期の遺構は、当然ながら旧日本陸軍（第二師団司令部）の遺構を「切って」（考古学用語で、遺構が先行遺構の一部を壊して重なりあうこと）、検出されます。両者を比較すると、旧日本軍と米軍との設備の差を実感します。旧軍施設は、土管やレンガや石の暗渠などで作られています。年代差を勘案しても、両者の差はあまりに歴然として見えます。私はある時、発掘調査担当者との会話で、この相違はなんという差だろう。太平洋戦争の南方戦線での、基地の違いが目につかびます。このような相手と戦争をしたのでした、と語り合いました。武器や弾薬などについても、想像に余りがあります。脇道にそれますが、漫画家の水木しげるさんの作品に描写された状況を連想してしまいました（ラバウル海軍航空隊基地など）。

昭和20年7月10日の仙台空襲に関連すると推定される遺構や堆積物も、検出されたことがあります。キャンパスの中にも、戦争について学ぶ面もあるという事例でした。（また近代の遺構や大学の歴史に関しては、菅野2022a, 2022bをご参照ください）。

戦国時代から泰平の世へ

仙台城と聞くと、すぐに思い浮かぶのは、青葉山の上の本丸跡地区ではないでしょうか。各種の観光パンフレットやネット上ご案内サイトでも、伊達政宗公の騎馬像のある一帯を、また青葉城とも称する仙台城の中心、と思われることでしょう。ここからの眺望は、皆様ご承知のように、素晴らしいものがあります。ところが、史実として、仙台城の中核は、東北大学川内南キャンパスの場所でしたと聞くと、意外に思われる方もいらっしゃるのではないでしょうか。今、大学キャンパスに行っても、仙台城の面影は全く見当たりません（教育と史跡の課題について長々と説明してきた理由でもありました）。

伊達政宗の死後、二代藩主忠宗は、**二の丸の造営**を開始しました。寛永15年（1638）以後です。二の丸が作られて以後は、仙台藩の政務の中心はこちらに移り、その後幕末までずっと、仙台城の中核としての機能を果たしてきました。藩主は二の丸に居住し、奥向き（仙台城では「中奥」といいました）も表（政務の中心）御殿の西北側にあり、御鈴廊下を通過して、藩主は男子禁制の中奥へと行きました。表御殿の中核は、小広間でした。ここは、現在

の川内南の厚生会館（学生食堂）の付近になります。中奥は、文学研究科、教育学研究科のあたりになります。

伊達政宗は、慶長 6 年（1601）に仙台城（千代とも）本丸の築造を開始して、2 年ほどで完了したとされます。大広間も慶長 15 年に完成しました。大広間跡は、仙台市教委により 2001～2009 年に発掘調査されました。東側は広瀬川に臨む断崖、南側は竜の口溪谷、西側の尾根は堀切で遮断され御裏林（現・天然記念物青葉山）が広がっていました。このような要害の地にある山城の性格が強い城郭でした。難攻不落が最重要だった、戦国の世にふさわしい立地でした。江戸時代の泰平の世となって、**城郭が果たす役割**も大きく変化しました。二の丸造営は、このような時代の変化に対応したものでした。城下町から大手門へ、そして今の萩ホール前の広場付近の詰御門（つめのごもん）の先の二の丸は、新しい時代にふさわしい地域統治の中心としての城郭の姿だったといえるでしょう。山城から平城、平山城へという変化を、実質的に具現したと言えるかもしれません。

国史跡の部分指定ということ

仙台城跡は、60 万石余を領した仙台藩主伊達氏の居城跡であり、日本史上、近世城郭の中でも第一級の遺跡であるとの評価を受けてきましたが、史跡指定には至らずにいました。国指定の史跡は、原則的に遺跡全体を保護していく政策が取られてきたという事情もあったようです。史跡指定にあたって、より現実的な部分的指定も考慮されるようになってきた状況下で、2003 年 8 月に官報告示で指定史跡となりました。この時は、市有地と同意を得られた範囲約 66ha について指定されました。本丸地区が中心です。東丸（三の丸跡）も含まれています。続いて 2010 年に二の丸の一部（二の丸跡西端部から武家屋敷および御裏林にかけて）、2012 年に本丸跡西部が追加指定されています。

これを要するに、仙台城跡の遺跡の中での、主要な未指定地部分として、東北大学川内南キャンパス、護国神社敷地があります。これらは、仙台市の計画の中では先述しましたが「**史跡指定を目指す範囲**」となっています。すなわち、土地が埋蔵文化財として含むその価値については、すでに国として評価を確定したという意味にもなるわけです。大学教育の不可欠な場所として活用されている土地は、また史跡の中核部分の価値も有するという複雑な事情となり、今回の講座で掘り下げて紹介してみようと思いましたが次第であります。

令和 3 年現在で、約 70.3ha が史跡指定地となっています。地図をみると分かりやすいです（スライド）。将来に向けての整備地区区分も、仙台市教委（2021）による『**史跡仙台城跡整備基本計画**』で公開されています。また市教委 2019 年の『**史跡仙台城跡保存活用計画**』は、それと対になる内容で、埋蔵文化財の内容と価値を主として考察しています。仙台市の 10 年間以上の長期的な整備基本計画では、二の丸地区は東側が「大手門整備ゾーン」に含まれて、「大手門を中心とした、二の丸や扇坂、中島池を含む一体的な歴史的景観と、藩政の中核としての二の丸について理解を深めるゾーン」（概要版から引用）となっています。二の丸の中心部は大学キャンパスであり、計画においては具体的な整備ゾーンの西の外側

になります。

近年、国の政策として、遺跡全体の整備へ向けての状況が整うまで、主要部分の史跡指定を部分的に行なって順次、整備していくという方向性は、文化財保護法改正もあって、現実的な方策として進められるようになってきました。宮城県内でも、仙台市太白区に所在する「仙台郡山官衙遺跡群（郡山官衙遺跡と郡山廃寺跡）」で、2006年7月28日に主要部分（遺跡中心部から南側）が国指定となつて後、追加指定がなされています。改正文化財保護法では、個別の文化財の保存活用計画を策定できるとされました。仙台市は遺跡面積約60haという広大な範囲を視野に、将来的には約9haの指定を目指すということです。多賀城以前の陸奥国府である郡山遺跡は、方四町のⅡ期官衙と郡山廃寺、真北から東に約30度振れたⅠ期官衙（7世紀後半の太平洋側の城柵か）を中心にした広大な遺跡ですが、仙台市街地の中心部にあり、長町副都心（あすと長町）の東に隣接する立地です。保存と活用との両立が問われる事例となるでしょう。「教育と史跡」に関係することでは、遺跡中心部には郡山中学校があつて、校内に遺跡の展示室があります。

さながら「石垣博物館」

さて、そびえたつ石垣は、近世城郭のハイライト的景観です。各種メディアや図書の名城シリーズなどでも、石垣、防御の枳形、虎口、堅固な門、広く深い水堀、そして天守や櫓の建築、といったところが、一番人気でしょう。詳しいファンのかたは、また曲輪の配置など縄張りに注目されるでしょう。城郭の造営は、**普請と作事**に二分されますが、土木工事である普請の方が非常に重要でした。私たちが城跡を訪ねますと、勇壮な建造物にまず強い印象をうけますが、実はその基盤になっている工事は、もっと重要なことでした。

ずっと大事な土木工事の中でも、水の処理は一段と高度な技術でした。仙台城でも、本丸から急な崖地形を経て中門跡から、東丸（三の丸跡、仙台市博のあたりですね）への一帯、扇坂の深い沢（千貫沢）、また五色沼から長沼（東丸の水堀）と巽門東の堀跡（2005～2007年に発掘）、上流になる中島池、そして築城期の登城路でもあつた東丸南側から巽門を経て造酒司跡、清水門付近を散策してみると、高低差のある複雑な地形で、水流を高度な技術で制御した当時が偲ばれると思います。まさに「**城は水なり**」という言葉の思い浮かべます。

そして急坂を登り本丸詰門（大鳥居のあたり）へ、左に豪壮な石垣がそびえるのを見て坂を登ります。仙台市は、この周辺の石垣が変形し危険な状態になっているとの認識に基づいて、1997年から2004年に、非常に大規模な解体修復工事を実施しました。石を取り外して組み直すという大工事は、全国的にも文化財保護の事業として、極めて高い評価を受けました。ひとつひとつの石に番号を付して、石の状況を判断し、新しく補完し、本来の形に積み直すという大工事でした。その発掘調査の過程で、**石垣の遺構が3期にわたって検出**され、石の加工、石垣の裏側の処置（第Ⅲ期の階段状石列）、旧石垣の活用など、当時の絶妙で高度な技術が明らかになりました。切石積み（石の形を加工して積み上げる）の遺構の下に、野面積み（のづら、石をそのまま積み上げる）の石垣、さらに勾配が緩い石垣と、時期

の異なる遺構が重層して検出されて、さながら「石垣博物館」といわれたほどでした。17世紀の地震の後に修復が行われて、縄張りが拡張されていた状況も明らかになりました。私も何度も現場を見学して、これが政宗公の時代の遺構か（Ⅰ期とⅡ期）、と感動にひたった記憶も新たです。一部の石垣のようすは、本丸大広間の遺構（礎石）展示整備、仙台城見聞館の整備と連動して、展示されています。

まとめ：二の丸地区の史跡と教育

川内南キャンパスは、仙台城全体の中でどのような場所であったのかを見てきました。文・教・法・経の文系4学部、大学附属図書館が立地する、文科系教育の中心となっています。歴史遺産との共生を通して、時空を超える広い視野を養う、いわば現代的教養を身につけた有意な人材が育てほしいと望むばかりです。

仙台城の史跡指定（2003年）の前と後では、キャンパスの文化財保護についての認識にも、かなりの変化がありました。「これまでに、川内南キャンパス内は、18地点におよぶ調査が行われました。その研究の結果、建物跡やその位置関係、出土遺物などの具体的な様子が明らかになってきました。」（埋文調査室だより1より）。

大学施設の整備のため、調査は記録保存の目的であり、発掘調査地点は新施設になりました。たとえば、仙台城中奥の西辺部分の調査は、NM17（二の丸第17）地点でした（発掘調査は2000年度に実施。報告書は埋文調査年報18、2005年度刊行）。現在は教育学研究科・教育学部が入る、11階建ての**文科系総合研究棟**が建っています。ここの調査では文化元年（1804）の落雷火災による二の丸焼失の後に、復興途上の建物跡、廃棄物の集積、その後の遺構が発掘されています。中奥のトイレ遺構のようすと出土品が興味を引きます（スライドで紹介）。当時の城内生活を彷彿とさせます。

仙台城の国史跡指定によって、キャンパスにある遺跡の重要性、その価値は国レベルで確定したことを前述しました。指定後にも、南キャンパスでは新たな施設整備が実施されました。法・経の大講義棟2棟を、新講義棟に建て替えることになり、現在の名称は「**文科系総合講義棟**」として新しい教育施設となりました。ここは、二の丸の中心部になります。埋文調査室は、2013年に試掘調査、2014年に確認調査を実施しました。この場所は、二の丸の「表」と「中奥」の境界付近と判明しました。江戸時代の遺構は壊さず、保存状況を確認する調査でした。二の丸の遺構は1970年代の移転にもかかわらず、良好に保存されていることが分かりました。そして、既存建物の基礎部分だった所（既に遺構が無くなってしまった部分）のみを用いて、特殊な工法により、**遺構を破壊しないで建物が実現**しました。確認調査の現地説明会（2014年6月14日）には、120名の参加者があって、市民的な関心の大きさを示しました。（埋文調査室年次報告2014）。

この地での「教育と史跡」という課題は、また文化財保護をめぐる普遍的な課題を突き付けます。仙台城の二の丸という中枢の実際については、埋文調査で多くのことが判明しています。埋文調査室の刊行物を参照していただければと思います。仙台市の仙台城跡整備計画

を紹介しました。学生諸君に遺跡を知ってもらう試みを説明しました。「遺跡をまもって人づくり」と言えますでしょうか。今後、長期的なスパンで遺跡の将来を考えていく必要が続くでしょう。どこの文化財にも共通する課題は難問です。その解決に容易な結論は期待できませんが、先述しましたように、開発と保存とを択一的に捉える発想は、過去の考え方であるということ、最後に繰り返して私のお話を終わりとさせていただきます。

ご清聴まことに有難うございました（長文になりましたが、最後までお読みいただき、有難うございました）。

（本稿は、当日スライドを踏まえつつ、講演内容に補足加筆して再構成したものです。なお参考文献は、比較的入手・閲覧しやすいものから選択しています。ネット上で公開されている資料も多くあります。）

参考文献 1

菅野智則（2022a）「近代における建物配置の変遷」、野村俊一・加藤諭・菅野智則編『学都仙台の近代－高等教育機関とその建築』所収、東北大学出版会。

菅野智則（2022b）「近世から近代への基礎構造の変化」、野村俊一・加藤諭・菅野智則編『学都仙台の近代－高等教育機関とその建築』所収、東北大学出版会。

仙台市教育委員会編（2019）『史跡仙台城跡保存活用計画』。

仙台市教育委員会編（2021）『史跡仙台城跡整備基本計画』。

仙台市史編さん委員会編（2006）『仙台市史 特別編 7（城館）』仙台市発行。

藤沢敦・金森安孝（分担執筆 2006）「第二部仙台城と近世城館 I 仙台城」『仙台市史 特別編 7（城館）』241－392 頁、仙台市発行。

参考文献 2（埋蔵文化財調査室の公開資料から）

・東北大学埋蔵文化財調査室編（1985～2010）『東北大学埋蔵文化財調査室年報 1～24』。
（東北大学構内の遺跡発掘調査の報告書です。各年度の調査室活動内容も含まれます。全て、「全国遺跡報告総覧」（奈良文化財研究所 HP から入る）、また「東北大学機関リポジトリ TOUR」（東北大学附属図書館 HP から入る）にて、公開されています。どの巻に、キャンパス内の、どの地点が収載されているかは、埋蔵文化財調査室の HP で確認できます。また、地点名と場所、概要については、『東北大学埋蔵文化財調査室だより』で紹介されています。）

・東北大学埋蔵文化財調査室編（2011～2020）『東北大学埋蔵文化財調査室調査報告 1～8』。
（上記『年報』を引き継ぐ出版物で、発掘調査の報告書を、別途『東北大学埋蔵文化財調査室年次報告 2007～2020』から分離して刊行しています。各巻収載の遺跡地点については、埋蔵文化財調査室 HP で紹介しています。）

- ・東北大学埋蔵文化財調査室編（2023 まで随時）『東北大学埋蔵文化財調査室だより』vol.1
～vol.8。
（同調査室 HP からダウンロードできます）。